
思い、思われ、

速水 ひより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い、思われ、

【Nコード】

N0595A

【作者名】

速水 ひより

【あらすじ】

犬猿のなかの2人。いつも喧嘩をしているが、明らかに様子がおかしくて…？

「何でこんなことするのよ!」

「そんなことぐらいでいちいちわめくな!五月蠅い!」

「そんな事って何!? あたしはすごい楽しみにしてたんだから!」

「俺はそんなこと知らん!」

いつものように聞こえる怒鳴り声。

2人の男女が互いに意見を怒鳴り散らしている。

それを見てみぬふりをする3人の少年達。

これが、毎度の光景だ。

思
い、
思
われ、

「これあたしのプリンだったのに！」

「貴様がさつさと食わないから悪いんだ」

「なんですってえゝ!?!」

そう叫ぶのはレイラ・ハルピユア。14歳。

目はコーディネーターでも珍しい紅の瞳で、

その色と混ざったかのようなオレンジに近い金色の髪。

長さは腰くらいまで…と言った所。いつも頭の上のほうで1つに結
んである。

この監ヴェザリウスでも1人しかいない、女パイロット。

こう見えてザフトの“赤”だ。

その腕は確かなのだが、成人したばかりで妙に子供っぽい。

そのため、ヴェザリウスの中では酷く子供扱いされる。

「プリンはあたしの癒しなのよ!い・や・し!」

「知るか」

「イザークの馬鹿!おかっぱ!」

「なっ…!?!」

イザーク：と呼ばれた喧嘩男相手。

本名はイザーク・ジュール。レイラの3つ年上で17歳。

彼もヴェザリウスの“赤”である。

彼の容姿は、一言で言えば綺麗。

白く、透明な肌に、吸い込まれそうなアイスブルーの瞳。

髪は銀色で、肩の少し上くらいまである。

見た目だけで行くと完璧なのだが、性格はぶっきらぼう、負けず嫌いい。

人に上手く表現ができず、ぶっきらぼうに答えるのが彼の特徴である。

「俺はおかっぱじゃない！」

「おかっぱ！」

むむむっとにらみ合う2人。これも毎度の光景だ。

2人は負けじとにらみ続ける。

「はいはいはい。そこまで」

そう言ったのは黒い肌に、金髪の髪の少年。

その隣と前の席には緑の髪の少年と、紺色の髪の少年がいて同時にうなづく。

「ディアツカは黙ってろ（て）！！」

「は…はい…」

2人の不気味なオーラに感じたディアツカはすぐに身を引いた。

「やっぱりディアツカじゃ無理ですね」

「ニコル…そんなこと言うなよ…」

ニコルと呼ばれた緑の髪の少年はフフッと笑うと、紺色の髪の少年にお願いしますと一言言った。

はぁとため息をついた紺色の少年は口を開く。

「レイラ、プリンなら俺がやるからいい加減やめろ」

紺色の髪の少年がいうと、レイラはむむ…と考えて、

「わかった！」

そういうと嬉しそうに飛び跳ねていった。

その様子を落ち込んで見るディアツカの姿があった。

「ありがと。アスラン」

「どういたしまして」

レイラは嬉しそうにプリンのかぶたを開けると、食べ始めた。

リズムを取りながら、プリント食べていくレイラ。

その光景を楽しそうに見るアスランとニコル。

「んゝVおいしいなゝV」

「レイラっておいしいそうに食べますよね。見てて楽しいです」

「そお？」

「ただに食い意地はってるだけだろ」

またもや、イザークがつかかってきた。

その言葉を聞いて、カチンとくるレイラ…だが反論はできない。

たしかによく食い意地を張ってるので。

反論できないレイラはただ、食べる事しかできなかった。

「凶星か」

「五月蠅い！おいしいもんはおいしいの！」

半分キレ気味でイザークにいった。かなりの八つ当たりだ。

「あ」

「どしたの？ディアツカ？」

少し、苦笑いしながらレイラに言った。

「忘れてた…。隊長がレイラ呼んでたぞ？」

「ちょっと！そういうことは早く言いなさいよ！ディアツカの馬鹿！」

するとディアツカの頭にたんこぶができていたのだ。

レイラの特技、高速殴りである。

大急ぎで、昼食を食べ隊長のところに行く。

「じゃあ行ってくる！」

いってらっしゃーいっとアスランとニコルは手をひらひらさせて言った。

ディアツカは涙目になり、頭を抑えている。相当強烈なようだ。

プシューッとドアの開く後がして、シュッとドアが閉まった。

「まったく…イザークは素直じゃないですね」

「ほんとほんと…毎度やめて欲しいよ」

「ま、イザークだから仕方ないんじゃないの？」

「貴様ら…何がいたいんだ？」

3人は同時にはあっとため息をついた。1人ディアツカはにやにやしていた。

「イザークさあ…レイラのこと好きなんだろう？」

「なっ…」

ストレートにディアツカに言われ、フリーズ。

イザークの真っ赤になった顔にやっぱりそうかっと思う3人だった。

「そ、そんなわけないだろうが！」

「バレバレですよ？イザーク。みんな知ってます」

「館内の半分は知ってるんじゃないのか？」

「そんな出鱈目ながすな！」

「誰も流してないって。行動で分かるんだよ」

「ま、当の本人レイラが気付いてないから意味ないけど」

「俺はあいつのこと好きじゃない！」

ずばずば言われることに苛立ちを感じ、イザークはつい怒鳴った。

それでも3人は疑いの目で見てくるので、その場を後にした。

「イザークって本当に素直じゃないんですね」

その一言にうなづくアスランとディアッカであつた。

ディアッカに言われたことによってイザークは機嫌が悪かった。

全く関係のない人にも睨みつけるくらいだった。

ディアッカ達に言われた事を考えていたのだろう。

ド
ン
ツ

何かにぶつかった。機嫌が悪いイザークにとって最悪の出来事だった。

「気をつけろ！馬鹿が！」

「…すみません」

その声を聞いて、思わず顔を見る。

レイラだ。

何かおかしい。いつもなら反論してくるはずだ。

足元もフラフラしていて、何も見えてないように見えた。

「…レイラ？」

「…」

聞こえていないのか、それとも無視をしているのか、彼女は黙りこくったままその場を立ち去ろうとした。

「おい！レイラ！」

彼女の様子があまりにもおかしかったので、叫ぶが、

聞こえてないらしく、フラフラと自室に戻ろうとしていた。

「レイラ！」

思わずレイラの腕をつかんだ。

彼女はびくつとして、やっと振り向いた。

「…イザーク？ どう…したの？」

「聞きたいのはこっちだ。呼んでも振り向きもしない」

「あ、ごめん。で…？」

「その…なんかあったのか？」

ストレートに聞いたことに後悔した。

レイラはすぐに顔をうつむき、ぎゅっと唇をかみ締める。

「お兄様が…お兄さつまが…っ」

そういうとポロポロと泣き出した。

レイラのこういう一面を見るのが始めてのイザーク。

いつもは明るいとしか見てなかったもので、かなり戸惑ってしまった。

「お兄様が…っ地球軍の…爆発に…つまき、こまれ…て…」

そこまで言うてようやく理解した。

彼女の唯一の家族である兄貴が：死んだと言う事を。

イザークはそっとレイラの肩に手を置いた。

「我慢しないでいい。泣く時は：思いっきり泣けよ」

「う、っ…ふえ…っおに、…お兄様あああ！」

レイラはそう叫ぶと、イザークに抱きついた。

あまりにもありえない行動に、ビククリした。

彼女がこんな行動をとるのははつきり言っておりえない。

相当ショックで、身も心もボロボロなのだろう。

イザークは無言で抱きしめた。

それしか今できる事はないと思ったからだ。

「ううつ…いや、…イヤアア…お、兄さま…」

泣き叫ぶレイラはただその言葉を繰り返すだけだった。

だいぶ落ち着き、ベットで寝かせた。

そろそろシューティングの時間なのだが、レイラが一向に起きないので行くにもいけない。

「ん…っ」

「起きたか…。大丈夫か？」

目をあけたレイラはしばらくボーっと天井を眺めていた。

その瞳には、まだうつすら涙が残っている。

「そろそろシューティングの時間だか…お前は休め。いいな？」

「…イザークは行くの？」

その言葉…というか顔にドキツとした。

あまりにも可愛くて、イザークは少し動揺しはじめた。

「俺は、ま、まあ行くが…」

レイラは涙目になり、イザークに抱きつく。

またもや抱きつかれたイザークは混乱する。今日で2度目だ。

「一緒に…いて…」

普段の声とは全く別人の声のように聞こえた。あまりにも弱い。

たしかに、家族を失って1人で今いるのは辛い。

「…わかった。隊長に連絡する。お前は寝てろ」

「あり、がと…」

そうはいつたが、レイラはイザークから離れようとしな。

よほど、“1人”と言うのが怖いのだろう。

なんとか内線の受話器をとり、隊長に連絡する。

隊長は今日は無理だと言う事を分かっていたのですぐに承知してくれた。

イザークが休む事も、すぐに受け入れてくれた。

「…レイラ。横になれ」

連絡している間も、今も、ずっと離れないレイラ。

「…やだ」

「いいからなれ」

「や、だ…」

はあっとため息をつく。どうしたらいいか。

必死に考えるイザークにレイラは思いもしない言葉を発した。

「一緒に…寝てくれたら…寝る」

「は…!?!」

この一言に真っ赤になるイザーク。

仮にもイザークは男で、レイラは女。そんなことできるわけがない。

「レイラ…あのな…」

「イザークが一緒じゃなかったら寝ない」

はっきり言った言葉にどうしようかと考えるイザーク。

考えに考え、悩みに悩みに、

だが、結局は。

「∴電気消すぞ」

一緒に寝る事となった。

安心したかのようにすやすや眠るレイラ。

一方イザークは、自分の欲望をぐっところえ彼女を抱きしめていた。
これもレイラが言ったのだが。

『抱きしめてくれなきゃ寝れない』と言う事だった。

彼女が自分を必要としてくれる事はなんとなく嬉しかったのだが…。

一緒にベッドで寝ている…しかも抱きしめあっているのでイザークにしたら苦痛だった。

「寝れるかよ…」

独り言のつもりで言ったのだが、独り言ではなかった。

「寝れないの…？」

「な…お、起きてたのか？」

「さっき…」

もぞもぞと動き、イザークの顔を見つめた。

その顔は無償に可愛く見えた。

本当に子供のように可愛くて、イザークは真っ赤になった。

「…イザーク暖かい」

そういうとますます自分の方へよってきた。

イザークの我慢はそろそろ限界まできていた。

それでも必死に耐えて、なんとか気を紛らわそうとレイラをきつく抱きしめた。

「イザークは…いなく…ならないでね…」

「…」

「また…こうやって…一緒に…」

「…ああ。わかった。俺は決してお前を1人にしない」

「ありがとう」

ついさっきまで、喧嘩していた人達にはありえない会話だった。

さっきまで、怒鳴っていたのに今の彼女は震えている。

たった1人の家族を無くし、これから1人で生きていくと思っているのだろう。

「イザーク」

「なんだ？」

「あたしね…イザークが好き」

「なっ…」

いきなりの告白。

しかもこの状態だ。イザークの頭はパニック状態。

「だから…こうしてもらえてすごい幸せ…ありがとう」

そういい、レイラは顔を隠した。

イザークが混乱し、やっと整理がついたときには深い眠りに落ちていた。

「…俺にも言わせろよ」

イザークの言葉も虚しく、レイラはすやすやと眠っていた。

「終わった〜！」

「お疲れ様です、大丈夫ですか？レイラ？」

「大丈夫大丈夫！元気になったからさっ！」

「あんまり無茶はするなよ」

「ありがと。アスラン」

「そいえばイザークどこだ？姿が見えないよな…」

そのディアツカの一言に一瞬ドキッとした。

まさか皆と一緒に寝ました、だなんて言えない。

ましてや、昨日…イザークに自分の気持ちを伝えてしまった。

できれば会うことは避けたいのだが。

朝起きると、イザークは起きていたみたいだが待っててくれた。

大丈夫か？と聞かれたので、頷くとイザーク出て行ってしまった。

それ以来、会っていない。

「レイラ？どうかしたのか？」

「え！？な、なんでもない…よ！」

「それならいいけど…」

不思議そうにレイラを見たアスランであったが、すぐにいつもの目に戻した。

レイラはとりあえずホッとした。

「あたし、ちょっと用思い出しちゃった！じゃね！」

あまり、イザークの話題なんて聞きたくなかった。

それに皆鋭いから、何か気付かれると思った。

廊下を歩いていると、隊長に呼び止められた。

「もう大丈夫なのかね？」

「はい！すみません…シユミレーション…出なくて…」

「私はいい。それよりイザークにいいなさい」

「は…、い」

「それとコレ、イザークに渡してくれるかな？頼んだよ」

「あ、…はい」

とりあえず、イザークの部屋の目の前まで来てみる。

だがいざとなると呼びにくい。

どうしようか、どうしようか…と悩んで、部屋の前を行ったりきたり。

「…何をしているんだ？」

「え？」

ふいに声がした。この声は…。

おそるおそる振り返ってみると。

「イ、イザーク！」

「そんな馬鹿でかい声出すな。五月蠅い」

「う…」

「邪魔だ、どけ」

イザークは自分のIDを通して、ドアを開けた。

「…入らないのか？」

「え？ いいの？」

「お前の声は馬鹿でかいから、中で話した方がいい」

「失礼なっ！」

とりあえず、イザークの部屋に入った。

イザークの部屋というより、イザークとディアツカの部屋なのだが。

「で？ 何のようだ？」

「あ？ え、えっとね…これ！ 隊長から！」

「隊長？」

「うん」

差し出すと、イザークに手を引っ張られる。

急に引っ張られたので、何がなんだかわからなくなった。

隊長からもらった紙も、落としてしまいバラバラに。

「え…っ！？ちょ、イ、イザーク！」

「お前…反応遅いな…」

「だ、だって…びっくりするじゃない！」

「一緒に寝ろって言うほうがビックリすると思うが？」

「う…っ」

そういわれると、反論できない。

よくよく考えてみれば、自分の言った事が恥ずかしい事に今気付く。

「レイラ」

いきなり名前を呼ばれ、ビクツとするレイラ。

「好きだ」

「…え？」

「お前…俺に2度言わせる気か？」

「や、そ、そうじゃないけど…」

まさか、イザークが自分のこと好きなんて思いもしなかったからだ。自分から告白したのもあるが、返事が返ってくるとは思わなかった。

「お前を…独りになんて絶対しない」

「イ…ザーク」

「俺は、お前の傍にずっといる。約束だ」

「ず…っと？ほん…と？」

「ああ」

それを聞いたレイラは嬉しくて、涙がこぼれた。

昨日さんざん泣いたのに、悲しくて、泣いたのに。

今日は嬉しくて、こうやって抱きしめてもらえるのが嬉しくて。

ずっとずっとこうしてもらいたくて。

「お前は泣き虫だな」

そうイザークが言うとき己の唇をレイラの目尻に当てた。

「わる、っかったわ、ね！」

「レイラ…」

見つめる瞳。だんだんイザークの顔が近づいて来る。

唇が触れ合うその瞬間に目を閉じた。

「お前には俺がいる。忘れるな」

「…うん」

2人はもう1度キスをする。深く…長い…。

ドアの向こうの視線も知らずに。

「イザーク…鍵くらいかけろよ…」

「それにしても大胆ですね。イザーク」

「そうだな。いきなり『好きだ』なんて」

「レイラの発言にもびっくりだけど。『一緒に寝て?』だろ?」

「どっちもやるな…」

覗き見していた事がバレ、あとで散々怒られたのは言うまでもない。

END

(後書き)

■あとかき■

不完全燃焼…。

なんですか…これはUu

とりあえず、犬猿の仲からラブラブカップルにしたかったんですが。

な、なったのかな？

ディアツカギャグ入れたかったな(泣き)

次はギャグ頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0595a/>

思い、思われ、

2010年11月12日11時24分発行